

行けば何とかなるよ

甲南女子大学人間科学部心理学科 教授

山田尚子 (やまだ なおこ)

私は2011年4月から翌年3月までの約1年間、アメリカのシンシナティ大学心理学部に滞在しました。シンシナティ大学は全学生数が当時で約4万3000人、古く格式ある校舎や著名な建築家による現代的な校舎が混在し、全米の美しいキャンパス・ベストテンに入ったこともある大学です。

ここでお世話になったマシューズ教授は応用心理学やパーソナリティ心理学の学会長を兼任されるほど著名な研究者で、最近では情動知能に関する研究も多く目にします。先生はいつもお忙しそうでしたが、「哲学部の教授とランチ」「大学のカフェテリアでワインテイティングの会がある」などと誘ってくださり、また顔を合わせるたびに「万事OKですか？」と気にかけてくださいました。私の研究についても何度かお話をする機会がありましたが、スケジュールの調整も難しく、「明日のお昼から時間がとれます」と前日の夕方と言われて徹夜で資料を作ったこともあります。この時に先生からいただいた助言は、今後研究を進めるうえで貴重な財産になると思います。

先生の講座はヒューマンパフォーマンスラボという名称で、当時は5名の院生が所属していました。ラボミーティングは1クォーター（今秋からセメスター制を導入）に1～2回開かれ、先生と院生および院生の実験を手伝う学部生が参加します。ミーティングは院生が各自の研究の進捗について報告し、質問や助言の時間を

長くとりという形式でした。

ラボの院生とはミーティング以外にもいろいろと話す機会が多く、院生の悩み（研究が進まない、就職が不安、など）は日米共通だと感じました。特に研究室を共有していた院生とは一緒にいる時間も長く、彼女が修士論文を書き終えて口頭試問が終わった時には思わず抱き合って喜びました。夫婦でこのラボに所属しているカップルは、どちらも社会人経験の後に大学院に入っていたので他の院生よりは年齢に近いこともあり、よく一緒に食事や観光に出かけ、自宅にも招待してくれました。また臨床心理学系のラボに所属する院生の紹介で、医学部で開かれているケースカンファレンスにも参加させてもらい、多くの症例の背景に宗教と、それからやはり社会経済的要因を考慮する必要があることを強く感じました。

先生の講義もいくつか聴講させていただきましたが、院生向けの講義では討論の時間も長く、毎回「日本ではどうですか？」と研究事情や社会情勢、文化的背景について尋ねられるので、どこかで読んだ「海外に出たら一人ひとりが日本代表」というのは本当だなあ……と思いつつ、何とか意見を伝えようと悪戦苦闘の毎日でした。またラボミーティングと研究法の講義では、ゲストレクチャーということで1～2時間ほど自分の研究について話しましたが、どちらもどうやって乗り切ったか思い出せないほど緊張しました。

生活場面での苦勞に触れるスベ



Profile — 山田尚子

1991年、甲南女子大学大学院文学研究科心理学専攻博士後期課程単位取得退学。博士（心理学）。甲南女子大学心理相談研究センター助教授を経て、2010年4月より現職。専門は人格・認知。著書は『失敗に関する心理学的研究』（単著、風間書房）『5因子性格検査の理論と実際』（分担執筆、北大路書房）など。

ースはありませんが、危険なことも、日本とは違う様々なシステムに慣れていった過程も今となっては笑える話ですし、大学以外で人と知り合いになる時には「研究」という共通言語がないぶん「英語の壁」も厳しく、自分の素が出る必死なやり取りになったと思います。これらも新鮮な経験でした。

海外に出る前、不安と緊張でいっぱいだった私に恩師は笑顔で「行ってしまえば何とかなるよ」と言ってくださいました。これから海外に出る機会のある方、特に若手の研究者にも同じ言葉を贈りたいと思います。



ラボミーティング終了後。後列中央がマシューズ教授。